愛知の博物館　№91

メナード美術館

メナード美術館は、メナード化粧品の創業者夫妻が中心となり収集した美術品を広く一般に公開するため、1987年10月、夫妻の出身地である小牧市に開館しました。

コレクションはマネをはじめとする印象派以降のヨーロッパ絵画、明治・大正・昭和から現代に至る日本画・日本洋画を主体とした絵画、彫刻など約900点、工芸、古美術など約500点を合わせたおよそ1400余点。これらを様々な角度からご覧いただけるよう、独自の展覧会を約2か月ごとに開催しています。

2009年に増設した「アネックス」は多目的ホールとして、資料閲覧や休憩場所としてご利用いただく他、講演会や講座など各展覧会に合わせた企画を随時行っております。

目　次

●愛知県博物館等職員研修会 …… 2
●第34回東海三県博物館協会研究交流会 …… 3
●「平成21年度部門別研修会」の報告 …… 4
教育・普及部門研修会 、調査・研究部門研修会、保存・修復部門研修会の報告

愛知県博物館等職員研修会

平成21年度愛知県博物館等職員研修会は、「地域社会と美術館・博物館」をテーマに、平成21年10月22日（木）、岡崎市図書館交流プラザりぶらホールにおいて実施。出席者は、協会メンバーに一般参加者を加えたおよそ80名であった。

本研修でテーマに掲げた「地域社会」との関係性については、近年、多くの美術館・博物館が共通して抱えている問題であろう。協力体制や連携活動、あるいは地域起こしといった視点は、全国に数多くの美術館・博物館が存在するなかにあって、その館の独自性を支えるものであり、それ故、地域における館の存在意義を高める重要な側面を持っている。一方で、本年平成22年に愛知県で開催予定のアートトリエンナーレをはじめ、ここ数年、美術館・博物館ではなく自治体やNPO法人などが主体となったアートプロジェクトが新潟や横浜、神戸、瀬戸内など全国各地で推進され、美術・文化が、地域振興の常套手段として盛んに活用されている。しかし、こうした取り組みはイベント性が高く、ともすると一過性に終わる可能性も十分にあるため、研修会では、現状を踏まえながら、美術館・博物館が、如何に継続的に地域社会に関わり、地域と連携をはかることが可能かを焦点に、下記のとおり基調講演を含む3本の講演・事例報告を実施した。

①基調講演　北川フラム氏（越後妻有アートトリエンナーレ総合ディレクター）

「アートによる地域活性化—大地の芸術祭他を事例に—」

②報告1　黒澤浩美氏（金沢21世紀美術館学芸員）

「創り手の顔が見えるプロジェクトに：金沢アートプラットホーム2008」

③報告2　石田泰弘氏（愛西市教育委員会学芸員）

「地域との連携：あいさいの御鍬祭展」

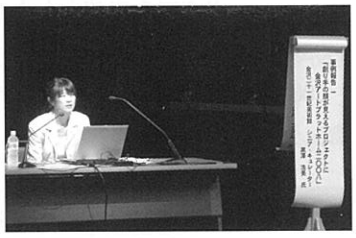
基調講演では、2009年に4回目を迎え、日本におけるアートトリエンナーレ事業の草分けとなった「大地の芸術祭」を事例に挙げながら、総合ディレクターの北川氏にお話をいただいた。アートプロジェクトが、地域を活かし、地域に生かされるようになるまでに要した時間と地道な活動が紹介されたのは勿論、如何に芸術・文化が、私たち人間の全生活において、有用で豊かな可能性をもつものであるかが熱く語られ、聴講者の関心を惹きつけた。

黒澤氏には、金沢市の各所を会場に実施された「金沢アートプラットホーム2008」についてお話をいただいた。参加作家たちが、如何に積極的に地域住民に働きかけたかが紹介されると同時に、作家と住民のパイプ役としての美術館の役割についても触れられた。この企画は継続実施が予定されており、今後の課題などについても述べられた。

石田氏には、60年に1度行われる尾張西部地方の御鍬祭りに際して実施した調査と記録作成についてお話をいただいた。60年という長い年月によって薄れた祭りの記憶を、地域住民からの聞き取りなどから掘り起こしていく過程が具体的に紹介され、また調査結果や今回の祭りの記録を整理保管することによって、博物館活動が、祭りを次代に継承するための一助となることが語られた。

1日の研修会はあっという間に終了したが、地域との連携という問題について、異なる立場、異なる専門の方からそれぞれお話を伺うことができ、今後、各館が活動をする上での大きな刺激となったのではないだろうか。

北川フラム 氏



黒澤浩美 氏

石田泰弘 氏

第34回
東海三県博物館協会研究交流会

東海三県（愛知・岐阜・三重）の博物館関係者が交流を深めるとともに、各館園がかかえる共通の課題について事例報告・意見交換をおこなう恒例の研修会が、下記のように開催された。

◎　平成21年11月19日（木）13：30～
　会　場　　岐阜県美術館
　参加者　　68名　愛知県　19名
　　岐阜県　37名
　　三重県　12名
　テーマ　「環境と人にやさしい博物館
　　～文化財の保存と博物館の環境」

1　基調講演
　岐阜県美術館　館長　古川　秀昭
2　岐阜県の事例発表
　岐阜県美術館　学芸員　廣江　泰孝
3　愛知県の事例発表
　「陶磁資料館での保存活動
　　～試行と実践の間で～」
　愛知県陶磁資料館　学芸員　田村　哲
4　三重県の事例発表
　「斎宮歴史博物館における
　　資料保存環境についての取り組み」
　斎宮歴史博物館主査兼学芸員　星野　利幸
5　岐阜県美術館企画展視察

従来、文化財を虫黴害から守るために行われてきたさまざまな化学処理。その代表がガス燻蒸であるが、近年、環境と人体への影響を配慮して、新たな方向性「総合的有害生物管理＝IPM」に基づいた試みが行われている。今回の研修会は、このような課題に取り組んでいる館の事例を学び、今後の博物館園の活動と施設のあり方を考えるものであった。

基調講演は、昨今の厳しい財政状況のもと、設備投資はおろか電気代確保もままならない現状で、博物館園の環境を保持するために、本当に必要なのはどんな取り組みかという問題意識の提起がおこなわれた。

各事例報告では、まず岐阜県美術館から、独自開発された低酸素濃度処理装置が紹介され、その他にも館内空調の実態を把握することで虫の侵入を防ぐ試みなどが報告された。

愛知県陶磁資料館からは、2005年に隣接地で開催された愛・地球博による環境的影響がみられたことと、立地条件から虫の侵入対策が厳しいなか、館内スタッフの協力を得て、捕虫体制をとる工夫の報告などがなされ、興味深いものだった。

斎宮歴史博物館の報告では、埋蔵文化財センターとしての機能も有するという施設・組織上の制約のなかで、「開かれた博物館」であるためのリスクと、それをふまえた環境対策を持続的に実行していく取り組みが紹介された。

総じて、各館で次代を見すえた現状＋αの取り組みを、どう持続させていくかが問われていると感じる研修であった。

来年度（第35回）は三重県において開催される予定。

岐阜県美術館廣江氏による事例報告

平成21年度部門別研修会の報告
〈教育・普及部門研修会報告〉

平成21年度部門別研修会は、調査･研究、教育･普及、保存・修復部門とし、数館で担当・実施する初めての研修会であった。

教育・普及部門研修会は、2月5日（金）、愛知芸術文化センター12階アートスペースＥＦを会場に行った。研修テーマは『ワークシートの作成・活用術』とし、その考え方や作成の流れ、各館の取り組みについて講演、事例発表していただいた。参加者は、歴史民俗、自然科学の博物館・資料館、美術館の幅広い分野から41名であった。

木下周一氏（㈲コミュニケーションデザイン代表）には、博物館の学習ツールや展示デザインの仕事に長年携ってこられた経験をもとに『ワークシートの学びをデザインする』と題し、教育理論からワークシートの目的・役割、デザインの注意点などについてお話しいただいた。特にその目的・役割の重要性を強調され、ワークシートには定型はなく、マニュアルやサンプルフォーマットの手法だけで作成すると創造性の乏しい類型化されたものになるなど、今後他館が取り組む際の示唆に富む内容であった。

㈲コミュニケーションデザイン代表　木下周一氏

次に事例発表とし、高橋節子氏（碧南海浜水族館･碧南市青少年海の科学館 副館長）より､『水族館・科学館学習でのワークシート活用』の紹介があった。運営研究会に所属する教諭と協議しながら、地域の活動、市の教育プログラムの一環にあわせた、ワークシートを作成、活用されている現状についてご報告いただいた。

加藤啓子氏（徳川美術館 広報・普及担当課長）には、『徳川美術館でのワークシート活用について』とし、常設展の解説補完のため、また夏休みの「子ども歴史教室」などでのワークシートを用いた活動についてお話しいただいた。以前からの試行錯誤と限られた費用での工夫など、現場の担当者に参考になるものであった。

近藤令子氏（愛知県美術館 学芸員）には、『学校との連携～ワークシートを中心に』と題し、正解のない美術鑑賞でのワークシートの難しさと工夫についてお話しいただいた。一事例の鑑賞ガイドでは、県内教諭の方々とのワーキンググループにより作成されたが、自館の分野にこだわらず、様々な分野の教諭が関わることにより、従来にはない広がりができたと言われた。

最後に参加館からのワークシート展示を行い、会場内で情報交換を行っていただいた。

各館ワークシート展示

今回の研修では、各講師の講演、事例発表により概念や他館の取り組みを知ることはもとより、各参加館の協力によりワークシートを展示することで、情報交換していただくことも目的であった。会場からの質問も多く、充実した研究会となった。

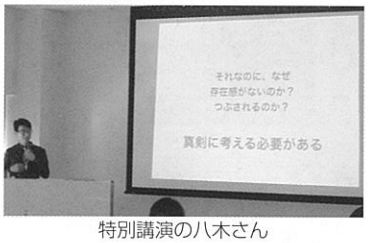
この研修会は、愛知県陶磁資料館、新城市鳳来寺山自然科学博物館、でんきの科学館、豊橋市美術博物館、名古屋市博物館、トヨタ博物館の６館で役割を分担し実施した。

（藤井麻希 トヨタ博物館）

〈調査・研究部門研修会報告〉

平成２２年２月１８日（木）、愛知芸術文化センターアートスペースEFで「事業としての調査研究」をテーマに研修会を開催しました。加盟館員以外の方にも関心を持っていただき、３１名の参加でした。

事業としての調査研究は博物館活動として重要な機能ですが、各館の状況が違い、今までなかなか議論されることがなかったと思います。机上論で終わってもつまらないということで、先進的な３つの事例の紹介と事前アンケートを基に総合討論を進めました。



特別講演の八木さん

トップバッターには、兵庫県立人と自然の博物館（通称ひとはく）の八木剛さんに「博物館のシンクタンク機能」というタイトルで話をお願いしました。「ひとはく」では、個人へのサービスが生涯学習支援なら、行政や他機関へのサービスをシンクタンク機能と位置づけています。県立大学との併設であり、３８名の研究職がいるなど、かなり特異な博物館かも知れません。しかし、八木さんの小気味の好い関西弁での話から、私たちにも役に立ちそうなキーワードを挙げておきます。「ビジビリティ（やっていることを目に見えるようにしよう。）」「絶妙な立ち位置（行政でもなく、学校でもなく、研究機関でもない）と武器（人・モノ・情報・空間）を活かす。」

次は地元の事例発表で蟹江町歴史民俗資料館大野麻子さんから「小規模館たちの取り組み～『あま歴史研究会』の活動」の紹介でした。この研究会は、海部地域の各教育委員会に所属する学芸員等の協力により運営されている郷土の歴史等の理解を深める会で、定期的に講演会の開催や季刊誌の作成発行をしています。学芸員が広域で活躍することによって、担当者同士の情報交換だけではなく、地元での評価にもつながっている活動です。

次の事例発表は田原市博物館鈴木利昌さんからの「田原市博物館における渡辺崋山研究への取組」でした。ここでは、「渡辺崋山」を郷土の宝物として、図書館、学校、地域活動挙げて、調査研究や普及活動をしています。その要が「博物館」で、調査研究の成果としての展覧会や研究書の刊行などにより、ますます宝物が光っていくのがわかります。

最後の総合討論では、事前アンケートから①各館の調査研究の位置づけ、②調査研究の内容や成果、③問題点や工夫について情報交換しました。長年にわたって博物館に携わってこられた名古屋大学名誉教授糸魚川淳二さんからは、博物館学的な研究も連携してやれないだろうかとのご提案もいただきました。総合討論は消化不良だったかも知れませんが、今回の開催趣旨の「現状と課題を共通認識」することは１歩進んだかなと思いますが、参加者のみなさん、いかがだったでしょうか。

総合討論
（八木さん、大野さん、鈴木さん）

今回の研修の企画は、実行委員の大野（蟹江町歴史民俗資料館）、志賀（徳川美術館）、千葉（岡崎市美術博物館）、森（愛知県美術館）、尾坂（名古屋市科学館）の５人で企画しました。「調査研究」は、多様な館で話し合うにはむずかしいテーマでしたが、１回で終わらせずに継続的に話題にし、議論していくものだと考えて準備しました。アンケート結果など今回配付の資料をご希望の方は、尾坂までご連絡ください。

最後に、講師のみなさんならびに会場を提供いただいた愛知県美術館そして参加者のみなさんにお礼申し上げます。

（尾坂知江子　名古屋市科学館）

〈保存・修復部門研修会報告〉

平成22年3月6日(土)、愛西市佐織公民館において、「地域史料の保存・活用」をテーマに保存・修復部門研修会を開催した。

今回の研修会は、事例報告3件、一般参加も可能な特別講演1件で構成した。事例報告では、各館を取り巻く状況や課題の中、どのように地域史料を守り、活用していくのかへの一助となることを目的とした。参加者は、28名であった。

中部資材株式会社　真野聡 氏

最初の報告は、真野聡氏〔中部資材株式会社（文化財アドバイザー）〕に、「地域史料の保存に生かせる実践的知識」と題してご報告いただいた。真野氏の報告では、家庭でも見られる身近な虫の中に文化財を加害する害虫が存在すること、また、気密性住宅の押入れ内では、湿度が70～80%になるため、収納保存用桐箱、中性紙保存箱などに入れて史料を保存すること、定期的に史料の点検をすることなどの重要性について認識させていただいた。

次に伊藤智子氏(豊田市郷土資料館学芸員)に、「市町村合併と地域史料の保存・活用の問題」と題してご報告いただいた。現豊田市は2005年4月1日に周辺6町村と合併し、人口では県内第2位、面積では県内20%を占める市域となった。そのため豊田市郷土資料館が管轄する市内の地域資料館は、12施設にのぼるという。報告では、ボランティアによる地域学習サポーターを養成し、地域資料館の資料を活用した体験学習の取り組みなどについて述べられた。しかし、こうした取り組みを進めながらも、人的・物理的にすべての地域資料館を維持していくことは難しく、各地域の特徴を明確にした上で、機能分化させ存続・廃止を含めた議論を進めなくてはならないとのことであった。

事例報告の最後は、遠山光嗣氏（新美南吉記念館学芸員）に、「文学展における民具の活用」と題してご報告をいただいた。「ごんぎつね」は、教科書に長年採用される国民的教材であるため、全国の教師から作中の民具についての問い合わせが多いという。こうしたことを受け、作中に登場する民具を集めた特別展「ごんぎつね」モノ図鑑展が開催された。開催に至るまでには文学館という性格もあり、資料の収集にご苦労があったが、開催後は大きな反響があったという。その後も、出前授業や民具の画像や情報をデジタルコンテンツ化し活用をしているとの事であった。

中央大学教授　松尾正人 氏

一方、特別講演は、愛西市教育委員会との共催で行った。参加者は、一般の方も含めて75名であった。松尾正人氏（中央大学教授）を講師にお招きし、「廃藩置県と近代日本」と題してご講演いただいた。廃藩置県は、明治4年(1871)に新政府によって行われた行政改革である。ご講演では、王政復古と版籍奉還、廃藩論の形成といった廃藩置県が断行される経緯を愛知県内の事例も含めて、具体的でわかりやすく解説された。

一般の方々も、問題なく行われたかにみえる版籍奉還や廃藩置県のイメージを払拭する講演内容を興味深げに聞いておられた。

最後に今回の研修会を開催するにあたり、ご多忙の中、講師を快諾していただいた諸講師の方々、ならびに愛西市教育委員会の関係各位に深謝申し上げます。

（一宮市博物館　坪内淳仁）

「愛知の博物館」 No.91
発　行　日　平成22年3月31日
編集・発行　愛知県博物館協会
〒467-0806
名古屋市瑞穂区瑞穂通1丁目27番地の1
名古屋市博物館内
TEL〈052〉853-2655
FAX〈052〉853-3636